OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	養護施設入所幼児に対する音楽療法の試み
Author(s)	山内, 美穂
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 2000, 5, p. 28-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7658
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

養護施設入所幼児に対する音楽療法の試み

山内美穂

【はじめに】

養護施設とは、児童が保護者のもとで養育されることが困難な時入所させ、安定した生活の場を保障し、日常生活の世話、学校への通学を保障することを目的とする施設である。発足当時は戦災孤児などの社会的・経済的混乱に起因する生活基盤の弱い児童を主にしていたが、現在は家庭における養育能力の低下（離婚、両親の入院、虐待、しつけの不十分さ等）によるものが多く、施設も児童養育の専門機関として位置づけられてきている（池上、1992)。しかし不適切な養育環境から分離するだけで子どもたちの発達を保障することは困難であり、生活場面だけでなく心理的援助も含めたさまざまなアプローチが行われる必要がある。特に乳幼児期は子どもにとって心身とも急速に発達し、その後の人生の基礎が形成される重要な時期であり、マターナル・デプリヴェーションやホスピタリズムなど養護施設での養育は様々な課題を抱えている。

対人関係の発達

乳児期に母親（養育者）と子どもの間に形成される愛着は、その後の人格形成に重要な影響を与え、その人の対人的な基本的態度を決定することが知られている。愛着の形成についてはハーロウのアカゲザルの実験が有名であり、乳（餌）を与えられるよりスキンシップのほうが小ザルにとって重要だということが明らかにされている。こうした乳児の愛着行動に母親が応じることで生まれる共生的な母子関係を通じて、乳児は「基本的信頼感」を形成していく。3才頃からは母子分離を経て父親との関係、同胞との関係が生じ、この心理的な三者的な関係が成立することによって「自分という意識（自我)」が確立される。その為、マターナル・デプリヴェーションなどのこの時期に受けた障害は、その後に重要な影響を残すといわれる。不適切な母子関係のみが影響を及ぼすものではないが、マターナル・デプリヴェーションを被った子どもは愛情そのものだけでなく、発達に必要な経験の不足と社会的・視覚的・聴覚的刺激の欠乏の結果、発達の遅滞を起こすことがある。長期的には情緒や行動の障害が見られることが知られており、反社会的行動や非行を示す子どもには施設や崩壊家庭出身者が多く見られるのは、きずなの形成の失敗と歪んだ人間関係に基づいていると考えられている（安藤、1999)。また自己評価が低い傾向にあることも知られており、心的援助のひとつとして、言語発達が途上の子どもに対しては遊戯療法が行われることが多い。日本の養護施設で音楽を用いたアプローチとしては坂本（1993）が、ソーシャル・ワークの立場からセルフ・エスティームの向上と全人的生活機能の発達促進を目標として、主に小学校低学年の児童を対象として行った研究がある。

本研究ではA養護施設に入所する2才児を対象に、安定した対人関係を提供することを目的とし、施設側の望む一般的に考えられる2才児のスキンシップ体験の提供や教育的意味合いも含めた心理療法として、音楽を用いた。またA養護施設で対象となる子ども達の

次年度のプログラムがモンテッソーリ教育であることも考慮し、音楽療法にはリトミックを取り入れて実施した。

リトミック

リトミックはエミール・ジャック＝ダルクローズが創始した音楽教育法の一つであり、音楽教育に心理学、発達学を加味して考えられたものである。リトミックの教育課程は・リズム運動、ソルフェージュ、ピアノ即興演奏からなり、各々下位目的が定められている。内容は、音楽に発達段階を考慮したリズム運動を加え、音楽的基礎能力を育てると共に、集中力・反射反応力・積極性・記憶力・想像力・自己表現力を育てることを目標としている。幼児のリトミックは、幼児を囲んでいる自然界の事物、幼児の経験している日常生活の出来事、幼児の遊び、絵を描くこと、幼児の持つ言葉、幼児の歌、物語を劇化すること、これらを模倣を通して音楽の基礎事項を学ばせ、さらにそれを使って創作させ、想像力を伸ばすように導くことを目的としている（中川、1999)。

【方法】

目的

１・肯定的自己像と適切な自己表現の獲得の援助、２・音楽を通しての想像力、集中力の育成、３・手遊びなど、日常場面の遊びへの素材の提供、の３点を目的とした音楽療法プログラムの作成のための課題を探る。

対象

A養護施設に入所する２～3才児7名（平均３才４ヶ月・男児５名、女児２名）と４才児１名（男児）の計８名が対象である。彼等は施設側が選択した子ども達であり、２～3才児は全員同じ学年に相当する。４才児１名は精神発達遅滞があり、発達のレベルは他児とほぼ同等であった。

なお子ども達の背景について理解するため、事前に施設のケースワーカーと担当の保育士から子どもの施設内での様子と入所理由等についてケースファイルの提供を受けた。

音楽療法実施形態

子ども達を４名ずつ（男児３名、女児１名）の２グループに分け、小集団で実施した。対象児が幼く表現手段が未発達であること、セラピスト１名では集団への対応が困難なこと、子どもとの関係を成立させやすくすると共に子どもに１対１の関係を保障することから、子ども達と同数のボランティア（女性3名、男性１名）にも参加を依頼し、対象児４名、ボランティア４名、セラピスト（筆者）１名を一グループとしてセッションを行った。

実施場所は、子ども達の生活棟とは別の事務棟3階会議室で行った。室内の机や椅子は取り除いたオープンスペースに、椅子替わりのサイコロ型クッションと電子ピアノを配置した。生活棟から事務棟への移動は保育士が担当し、事務棟入り口で幼児を迎える形とした。セッション時間は40分であるが、セラピストらと一緒に移動する時間を含めると全体では約50分となった。

プログラムはリトミック形式にのっとったものを用意した。はじめと終わりの挨拶の歌

と、全体的な流れは毎回同じものにし、セラピストがリーダー役となった。セラピストの態度は、遊戯療法のアクスラインによる8原則を用い、ボランティアにも同様の態度を依頼した。

記録はセッション終了後、ボランティアからも聴取を行い、グループ全体と各個人の行動観察記録を作成した。

実施期間

平成12年1月～3月にかけて、計9回実施された。

【結果】

始めに用意したプログラム内容は、2才児を想定したものであった。しかし、ほとんどの子ども達が参加時に3才であったにも関わらずプログラムへの参加は困難であり、1才児を想定したプログラム内容に変更して行うことが必要であった。プログラムへの適応順序は、即時反応（音楽の速度に合わせ歩行する）、身体運動、手遊び、歌唱の順であった。回を重ねると、自発的な手遊びや歌の一部を歌う行動が見られた。子どもに人気が高かったのは身体運動で、特に上下動や旋回運動をするものであった。しかし始めのうちは喜びと同時に恐怖が示されており、乳児期にゆり動かされた経験が乏しいことが示唆された。

全体的に回を重ねて場に慣れるにつれて自発的行動が増え、4～6回目になると各々の子どもに明確な自己主張が見られるようになった。

子どもとボランティアの関係は、まず始めに選択されたボランティア1名と1対1の関係が築かれ、それから他のボランティアへと広がりを見せることが観察された。施設での入所期間が長く、親との接触（面会）が少ない子どもほど、積極的に抱っこを求める傾向が見られた。

【考察】

行動特徴

音楽療法実施前に筆者は施設に入所する子ども達と接触する機会を持ったが、そこでもっとも観察されたのは無差別的愛着行動であった。無差別的愛着行動は被虐待児の特徴としてあげられるが（西沢、1994）、施設の子ども達全体に多く認められる行動であった。人見知りをしないばかりか、中には初対面でいきなり抱き着いてくる子どもも見られた。この傾向は、対象となった子ども達にも見られた。今回の音楽療法実施場所は子ども達の生活空間とは別の、子どもにとっては馴染みのない場所であったが、その場所に初めて保育士と離れ移動した際に、場に対して不安を示したのは初回参加6名中2名であった。他児が一緒であることも影響しているとは思われるが、初回に参加しなかった2名も初参加の折、入室時に多少様子を伺う態度を示しただけで、参加自体に問題は全くなかった。

子ども達の入所理由は様々であるが、いずれも複雑な家庭環境であり、半数の子どもは乳児院からの入所であった。内、最も低年齢での入所は生後2週間であった。今回の対象に被虐待児は含まなかったが、虐待的な養育環境で生育したと考えられるケースは見られた。子ども達と親（保護者）との面会等は平均月1回で、最も多い子どもは月4回であったが、面会のないケースもあった。施設において一人の保育士が24時間子どもに付き合う

ことは不可能であり、乳児院から入所している児も規則により2才時にはそれまでとは別の保育士と関わりを持つことになる。このように乳幼児期を通じて特定の養育者と安定した関係を結びにくいことは、子どもの対人関係の発達に影響を与えることが考えられ、無差別的愛着行動もその一つではないかと考えられた。

保育士に観察される養護施設内の子どもの行動と音楽療法の場での子どもの行動を比較すると、音楽療法の場では抱っこや指しゃぶりが多く観察された。指しゃぶりは空腹時や疲労・倦怠感、当惑したり不満がある時、さらには親の注意を引くために赤ちゃん返りとして起きるものである。初回には指しゃぶりが観察されず2回目以降に観察されたことや、大人（ボランティア）に抱き着き、指をくわえてうつらうつらと眠る態度等から、これは退行した行動ではないかと考えられた。

子どもの反応はそれぞれ個性的なものであったが、大きく分けて3パターンに分かれた。適応に時間がかかるタイプ、適応のよいタイプ、場への慣れが早く多動的な行動をするタイプ、である。適応に時間がかかるタイプには、性格的に大人しく慎重な子どもを含んでいた。しかし生活場面では活発で適応がよいのに、音楽療法の時間は甘えが強く適応に時間がかかる子どももおり、音楽療法の場では子どもが生活場面とは異なる行動を示すことが観察された。

大人との関わりにおいては、特定の大人と関係が形成されると他の大人にも積極的に関わっていったり、自分にとって特別な大人が他児の相手をすると怒ってみせる行動が観察された。これらは対人関係の発達をたどるものであり、子どもが特定の大人に愛着を持ち、甘えを示していると考えられた。また子どもの中には他児やセラピストらに対し、攻撃的な態度を示すものもいた。しかしこの行動を子どもは笑い、様子を伺いながら行っており、怒りの表現というよりもセラピストらに対しては自分の方に注意を引こうとするいたずら、他児に対しては言葉での表現が未発達なことと、不適切な学習の為の行動ではないかと考えられた。

抱っこ

子ども達が執拗に求める抱っこにはどのような意味があるのだろうか。ボウルビィは、乳児は成人との接近や接触を求める生物学的な傾性をもって誕生し、母親（養育者）の一定量以上の相互作用を通して愛着形成がされるとしており、ウィニコット（1965、1971）は“抱っこ”は、早期幼児期の絶対的な依存の段階において、未統合な自我を指示することにあるとしている。幼児は優しく支えられることで、「自分がある」という存在の確かさを自分のものにしていくという。“抱っこ”の他に、“母性的なかかわり”として挙げられる、“あやし”や“対象呈示”は「ごく普通の母親」であれば自然に行っていることである（Winnicott、1971）。しかし養護施設の子ども達は、これらを適切な形で体験していないことが多いこと考えられる。対象となった子ども達にとって抱っこは、どんな言葉より魅力的なようであった。それはまだ言葉が未発達であることとも関連すると考えられるが、抱っこされることで得られる自分の存在感の確認が魅力なのではないかと考えられる。

抱っこは愛着形成を築くために必要な手がかりの一つと考えられ、今まで満たされていなかった、経るべき過程をたどることは意味あることではないかと考えられる。しかし、集団の中では子どもの要求を見すごさざるを得ない状況になる場合があることや、子ども

をただ抱っこすることを目的とするのが適切かどうかは筆者にとって疑問であった。そこでプログラム自体の中に、身体接触の多い動きを取り入れ、プログラムとして適切な形で満たせるようにする方が良いのではないかと考えられた。

プログラム

プログラムは各回の事前に用意したが、内容はその時の子ども達の行動に合わせて変更し、実施された。回を重ねると子ども達はプログラムに従わず行動する傾向が観察された。しかし、好きな身体活動（旋回運動）用の曲が聞こえるとすぐに反応し、選択的な行動をしていることが観察された。このことから子どもの自発的な行動を許容しながら、一つの時間としてのまとまりをつけるために、またグループとしての活動ということを考慮し、プログラムは大まかな流れを固定した上でその日のテーマを定め、用意した内容をブロックのように子どもに合わせて適宜変更するのが良いと思われた。

各プログラムの課題として今研究では速さの弁別の他、大小、強弱の比較を取り入れた。これには子どもの発達に応じた課題を取り入れることが可能であると考えられた。課題と楽器叩きや手遊びを組合わせることで子どもに集中力が見られ、スキルとして獲得していくことが観察された。セラピストには子どもの行動に合わせての臨機応変な対応が求められるが、即興曲を多用するのではなく、使用曲と動作が一貫性を持って繰り返し使用される方が、曲が子どもにとって馴染みのあるものになっていくと考えられる。

また幼児を対象にした集団の場合、コ・セラピスト（今回のボランティア）の存在も重要である。幼児の対人関係は1対1から発展していくため、それを保障するためにも子どもと同数のコ・セラピストが必要である。同数以下の場合は、いわゆる“しっかりした、聞き分けのいい子”にしわ寄せがいってしまい、その子どもに不安や不満を抱かせることになると考えられた。

まとめ

音楽療法の利点は、音楽が聴覚的刺激であり、空間全体を包み込む力を有することにあると考えられる。音楽療法は遊戯療法の対象年齢以下の乳幼児に対しても、スキンシップのある音遊びとして取り入れることが可能であり、同時に教育的な目的も含むことができることがあげられる。またプログラム中に身体接触を取り入れることが容易であることもあげられる。

今回の音楽療法の実施期間（3ヵ月）においては、退行した状態を経て各子どもに自己表現が見られるのに2ヵ月を要し、自発的な行動が盛んとなるのに更に1ヵ月を要した。彼等には退行し、乳児のように抱っこされる期間を経ることが必要であったと考えられる。期間後半には抱っこが少なくなり、隠れんぼ行動が多く観察された。隠れんぼは能動的な「いないいないバア」遊びを原形とするもので精神分析的には「分離と再結合」という枠組みで理解される（山本、1995）。ただ隠れて見つけられた子どもの嬉しそうに笑う様子を見ると、隠れんぼは相手に自分を見つけてもらうために隠れるのであり、見つけてくれる相手がいるからこそ隠れるのだということが強く感じられた。

養護施設入所の幼児に対する音楽療法プログラムは、プログラムとしての形を保ちつつ、臨機応変に変化し、子どもとの間に愛着関係を形成できるものであることが望ましいので

はないかと考えられた。子ども達の生活の中では、音楽療法は僅かな時間でしかないが、決まった場所で決まったメンバーが顔を合わせ、密に関わってくれる大人と出会う体験は、子どもにとって有益なものではないかと考えられた。

同時にこのプログラムで考えられなければならない点は、子どもメンバーが音楽療法以外の生活時間も共に過ごしているということである。これは入院集団精神療法と同様に生活時間からの影響も大きいことが考えられる。子ども同士の模倣行動を引き出す意味では集団の方が望ましいが、子どもと一対一の関わり合いを更に重視するのであれば、施設内で小集団形式で行うことの意味を考える必要があると思われる。

尚、今後の課題としては具体的な音楽療法プログラムと記録・評価方法の作成があげられる。

引用・参考文献

安藤春彦・山崎晃資編　1989　母性剥奪　小児精神科治療ハンドブック　南山堂,396-400.

Davis,W.B.,Gfeller,K.E.,Michael, Thaut, M.H.　1992　"An Introduction to Music Therapy Theory and Practice".Wm.C.Brown Publishers.栗本文雄訳　1997　音楽療法入門　理論と実践　上・下　一麦出版社

Decker-Voigt,H.-H.,Knill,P.J.,Weymann,E.　1996　"Lexikon Musiktherapie".Hogrefe-Verlag.坂上正巳監訳　1999　音楽療法事典　人間と歴史社

池上栄一郎　1992　児童福祉施設・養護施設　氏原寛、小川捷之、東山紘久、村瀬孝雄、山中康裕　心理臨床大事典　培風館, 1150.

こども心身医療研究所編　1995　小児心身医学－臨床の実際－　朝倉書店

黒丸正四郎、花田雅憲編　1990　乳幼児の精神健康＜精神科MOOK No.25＞　金原出版

宮内和瑞子、藤岡邦子、川田行雄　1987　児童の集団精神療法　山口隆、増野肇、中川賢幸編　やさしい集団精神療法入門　聖和書店,321-342.

村井靖児　1988　音楽療法　徳田良仁・村井靖児編　講座サイコセラピー－アートセラピー　日本文化科学社

中川弘一郎監修　1989　乳幼児の表現活動　あそび・うた・動き　黎明書房

西沢哲　1994　子どもの虐待－子どもと家族への治療的アプローチ　誠信書房

大畑祥子編　1991　保育内容音楽表現　建帛社

坂上正巳　1998　音楽療法　徳田良仁・大森健一・飯森眞喜雄・中井久夫・山中康裕監修　芸術療法１理論編　岩崎学術出版社

坂本いづみ　1993　養護施設児童との音楽を媒介にしたグループワーク　音楽療法研究年報　日本音楽心理学音楽療法懇話会,22,103-117.

高野清純　1989　遊戯療法　上里一郎編　メンタルヘルスハンドブック　同朋舎出版,

山本力　1995　いないいないバア遊び　発達心理学辞典　ミネルヴァ書房,45.

氏原寛、小川捷之、東山紘久、村瀬孝雄、山中康裕　1992　心理臨床大事典　培風館

Winnicott,D.W.　1971　Playing and Reality　Tavistock Publications Ltd.　橋本雅雄訳　1979　遊ぶことと現実　岩崎学術出版社